異世界ゆるり紀行

子育てしながら冒険者します

11

Minazuki Shizuru

水無月静琉

登場人物
CHARACTER
マイル
タクミの契約獣となった
フォレストラット。
アレン
水神の子で、妹・エレナと
ともにタクミに保護された
少年。格闘術が得意。
フィート
タクミの契約獣となった
飛天虎。小型にもなれる。
ベクトル
タクミの契約獣となった
スカーレットキングレオ。
小型にもなれる。
タクミ・カヤノ
異世界に風神の眷属として
転生した本作の主人公。
アレンとエレナの保護者。
ボルト
タクミの契約獣となった
サンダーホーク。
ルカリオ
ルーウェン家に生まれた
ばかりの赤ちゃん。
ジュール
タクミの契約獣となった
フェンリル。
小型にもなれる。
エレナ
水神の子で、タクミに
保護された少女。
格闘術が得意。

第一章　合同依頼を受けよう。

僕は茅野巧（かやのたくみ）。エーテルディアという世界に転生した元日本人。

この世界の神様の一人である風神シルフィリール――シルがうっかり起こした不慮（ふりょ）の事故が原因で命を落としてしまったんだけど、責任を感じた彼によって転生させてもらったのだ。

転生してから気がついたのだが、何故か僕はシルの眷属（けんぞく）となっていて、しかもステータスに表示される種族は【人族？】と……人間まで辞めてしまったようだ。だがまあ、眷属としては仕事も役目もないとのことで、普通に冒険者となって気ままに生活している。

……いや、最初に降り立ったのがガヤの森というかなり危険な場所であったことと、そこで双子の子供を保護したことは、『普通』とは言い切れないか。

実は、その双子は水神様の子供で、シルの差し金によって保護することになったんだけど……アレンとエレナと名づけて、僕の弟妹として一緒に生活している。

いろんなことがあったが、この世界来てもう一年とちょっと、そろそろ二度目の夏がやってこようとしている。

今はどこにいるかというと、僕の後見をしてくれているルーウェン伯爵（はくしゃく）が領主として治める土地、

ルイビアの街。
そこに伯爵夫人のレベッカさんや、その子息であるグランヴェリオさんと再会するためにやってきたのだ。
そして、僕達はその街で、のんびり過ごしたり依頼をこなしていたりと、いつものように楽しく過ごしている。

今日はひょんなことから知り合った、エヴァンさんとスコットさんという冒険者と一緒に依頼を受ける予定だ。
二人が組んでいる冒険者パーティ『鋼の鷹』はBランクらしいので、僕達Cランクパーティの『白き翼』より格上の存在である。なので、今日はいろいろ勉強させてもらおうと思っている。
「夜光茸なんてどうですか？」
「お、いいんじゃないか」
冒険者ギルドで『鋼の鷹』と待ち合わせした僕達は、まずは依頼ボードに貼られている依頼書を吟味する。
僕の言葉にエヴァンさんが頷いていると、スコットさんが別の依頼書を示す。
「そうですね。それと、これはどうです？」
「いいですね」

「これはー？」
話し込む僕達を見て、アレンとエレナも依頼書を差した。
「クラーケンの素材……アレン、エレナ、それはちょっと止めておこうか」
「だめー？　じゃあ、これー」
「どれどれ……フレアトータスか？　これならいいんじゃないか？」
「そうですね。それならいいと思いますよ」
「やったー」
エヴァンさんとスコットさんの許可も得て、最終的には魔物素材系の依頼を二つ、薬草系の依頼を一つ選んだ。
「よし、これで決まりだな」
「では、受付をして行きましょうか」
「そうですね」
「もういくー？」
「行くよ～。アレン、エレナ、準備はいいかい？」
「うん」
受付を済ませた僕達は、早速街を出た。
「山と海岸、どっちから行きますか？」

「そうだな～、まずは山のほうに行ってジャンボエルクを探しつつ、夜光苔を採取できる場所に向かうか。そっちが片づいたら海岸のほうに回ってフレアトータスだな」
「それがいいでしょう」
「「やま～、いこう、いこう！」」
僕とエヴァンさん、スコットさんの話し合いで行き先が決まると、アレンとエレナが今にも走り出しそうになる。
「こらこら！　アレン、エレナ、勝手に行くんじゃないよ」
「「えぇ～」」
「ほら、手を繋ぐよ」
油断するとすぐにどこかに行ってしまいそうなので、久しぶりにアレンとエレナの手を繋ぐ。
「「えへへ～」」
やや不満そうな子供達だったが、一度繋いでしまえば、楽しそうに手を大きく振りながら歩く。
「仲が良いな～」
「そうですね。ほのぼのします」
「俺らの気も緩みそうな気がするが……まずいよな？」
「気をつけましょう」
エヴァンさんとスコットさんは僕達のことを微笑ましく見つつも、気を引き締めているようだ。

「「あっ」」
「ん？　どうしたんだ？」
「やくそうあった～」
「とってくる～」
薬草を見つけた子供達が早速駆け出そうとするが、手を繋いでいたため阻止できた。
そんな僕達を見て、エヴァンスさん達が声を掛けてきた。
「タクミ、子供達を自由にしていいぞ。なあ、スコット」
「ええ、構いませんよ」
「いいんですか？　この子達、本当に動き回りますよ？」
「どこかに行ったまま帰ってこない……ということはないのでしょう？」
「それは大丈夫ですね」
もしはぐれても位置がわかるようになっているからな。でも、子供達が迷子になること自体が想像できないかな？
「じゃあ、問題ないな」
「では、お言葉に甘えます。アレン、エレナ、目の届く範囲からいなくなるなよ」
「「は～い」」
エヴァンさんとスコットさんの許可が出たので子供達の手を離すと、二人は嬉々として薬草に向

かって走り出す。
「リリエそうあった～」
「クレンそうもあったよ～」
子供達は採取した薬草を手に持って嬉しそうに戻ってきた。
それからも、少し進んでは薬草を見つけるという行動を繰り返す。
「「またあった～」」
「短時間でこんなに……」
「凄いですね。自分達で稼いでいるって聞いていましたが、ここまでとは思いませんでした」
薬草を採っては僕のところに持ってくる子供達を見て、エヴァンさんとスコットさんが呆気に取られている。
今のところは、普通に見つけられる薬草しか採取してきていないんだけどな～。
「「あっ！」」
「お、また何か見つけたのか？　今度は何を見つけたんだ？」
さすがに慣れてきたのか、子供達が突然走り出すのをエヴァンさんが視線だけで追う。
「ちょっと待ってください！　エヴァン、あれ!!」
「ホーンラビットじゃないか！」
子供達の行く先に魔物がいたので、スコットさんとエヴァンさんが慌てる。

「エヴァン！」
「おうよ！」
「あ～……二人なら大丈夫ですよ？」
「いえ、タクミさん。ホーンラビットは弱いとはいえ魔物ですよ」
僕が止める間もなく、スコットさんの言葉に従い、エヴァンさんが武器を構えて子供達のところへ走っていく。
「「やぁー」」
「「……」」
だが、エヴァンさんが追いつく前に、子供達はあっさりとホーンラビットを倒してしまっていた。
僕の横で呆然とするスコットさんと、途中で走るのを止めるエヴァンさん。
「「たおしたー」」
「うん、おかえり」
アレンとエレナはホーンラビットの死骸を引っ張りながら帰ってきた。エヴァンさんも一緒に。
「アレン、エレナ、エヴァンさんとスコットさんが驚くから、魔物がいた時はまずは僕に言う。できるよね？」
「「んにゅ？　わかったー？」」
とりあえず、魔物がいたらすぐに走り出さずに申告するように伝えると、二人は首を傾げながら

も了承する。
そんな僕達の隣では、スコットさんとエヴァンさんが感心したように頷いていた。
「運動神経が良さ気なのは、剣を振っているのを見てわかっていましたが……ここまでとは思いませんでしたね。なかなか良い動きでした」
「鮮やかで見事な蹴りだったぞ」
「「えっへん！」」
二人に褒められ、アレンとエレナは嬉しそうに胸を張る。
と、僕はそこでとあることを思い出す。
「そういえば、戦闘スタイルを教えていませんでしたよね？　子供達は先ほどのように蹴り技が主体で、あとは水魔法。僕は基本的に魔法で、よく使うのが風魔法です」
「そうでしたね。私達のほうは見ての通り、エヴァンが背中に背負っている大剣、私はこの剣です。魔法はあまり得意ではないので補助程度ですが、エヴァンが火、私は水を使います」
「ずっと思っていましたが、エヴァンさんのその大剣は凄いですよね～」
アレンやエレナよりも大きな剣。あれを振り回すのには、かなりの筋力を使いそうだ。
まあ、僕も振り回すだけならできそうだが、操ることはできずにすっぽ抜けて、どこかに飛んでいくことだろう。
「「おにーちゃん、おにーちゃん」」

「ん？　どうしたんだ？」
「オオカミきたー」
「いってくるね」
戦闘スタイルについて確認していると、アレンとエレナが魔物が来たことをしっかりと告げてから走り出した。
「グレイウルフが三匹ですね」
「俺達って、こんな風にのんびりしていていいのか？」
「あのくらいなら問題ないですね」
そんなことを話しているうちに、アレンとエレナはあっという間にグレイウルフのもとに辿り着き、あっさりと倒してしまう。
「俺達の出番がなくなるって、冗談や比喩じゃなくて本気で言っていたんだな」
「そうですね」
武器の講習中、一緒に依頼を受けようと話していた時に僕が言っていたことを思い出したのか、エヴァンさんが大きく溜め息を吐く。そんな彼を横目に、スコットさんが尋ねてきた。
「タクミさん、実際あの子達は、どの程度の敵なら問題なく戦えるのですか？」
「グレイウルフなら大型の群れでも大丈夫かな？」
「……Dランクの群れが大丈夫なのですか。では、冒険者ランクはあえて抑えてあるのですね？」

「ええ、子供ですからね」
アレンとエレナの冒険者ランクはDランクで、実力にしては低めだが、あの歳でDランクなのは非常に珍しい。これよりも上のランクになると、悪目立ちしてしまうこと間違いなしだ。
「身分証の代わりなのでFのままでも良かったのですが、それだとランクが高めの依頼をパーティで受けられないので、それでDランクです」
「ああ、なるほど」
子供達の実力やランクについて話をしていると、子供達が三匹のグレイウルフを引きずって戻ってきた。
「「おにーちゃん、これ、おいしい？」」
「ん？　ん～、ウルフよりちょっとだけ良いお肉かな？」
「「じゃあ、ふつー？」」
「……まあ、そうだね。普通かな」
「「そっか～、ざんね～ん」」
普通と聞いて、アレンとエレナが少しだけしょんぼりする。
「じゃあ、食べないのか？　それなら売ればいいさ」
「「おにくはだめ～」」
うちの子達は順調に食いしん坊に育っているため、食べもの……特に肉類は絶対に売ろうとしないんだよな～。
「良い肉なら取っておくのはわかるんだけど、普通の肉を消費できないほど持っていても仕方がないだろう。だから、少し売ろう？」
「「だめ～」」
頑なだ……今度、こっそり売ってみようかな？
「「あっ！」」
「アレン、エレナ、どうしたんだ？」
「ちょっとまって～」
「ちょっとだけ～」
山を進んでいると、アレンとエレナが突然、道の脇にある茂みに入って行った。
「何だ？　どうしたんだ？」
先行していたエヴァンさんが振り返って、何があったのか尋ねてくる。
「すみません。何か見つけたみたいで……」
「ははっ、タクミ、そんな申し訳なさそうな顔をしなくてもいいぞ」
「そうですよ。あの子達にはいろいろと面白い経験をさせてもらっていますからね。自由に行動させてあげてください」

エヴァンさんとスコットさんが寛大で本当に助かる。
こう度々脱線していたら、普通なら怒ったり嫌な顔をしたりするだろうが、二人はそんな様子がない。本当に突拍子もない子供達の行動を楽しんでいるようだ。
「おにーちゃん！」
「いっぱいいたよ～」
そうこうしているうちに、アレンとエレナが戻って来た。まあ、まだ声だけで姿は見えないけどね～。それにしても……「いっぱいいた」とは何のことだろう？
「「うわっ！」」
戻ってきた子供達の姿を見て、僕だけではなくエヴァンさんとスコットさんも驚きの声を上げた。何故なら、子供達はそれぞれ片腕に一匹ずつと頭の上に一匹、計六匹のパステルラビットを連れていたからだ。
「……またか」
「またぁ!?」
「タクミさん、ちょっと待ってください。『また』ということは、以前にもあったのですかぁ!?」
エヴァンさんとスコットさんは、思わず零した僕の言葉を聞き漏らさなかった。
「ええ、まあ……」
大量のパステルラビットとの遭遇は、一度……いや、二度経験があって、これが三度目になるのかな？
「アレン、エレナ、そのパステルラビット達はどうしたんだ？」
「えっとね……あれ！　ほごした！」
「……保護」
どこから覚えてくるんだ、その言葉は……。
「じゃあ、あれか。ギルドでまた飼い主を見つけるのか？」
「それ！」
「でも、それだと飼い主がどんな人かわからないぞ？」
大事にしてくれる人のもとへ行けるのであれば〝保護〟になるかもしれないが、悪い飼い主に当たれば〝保護〟にはならない。
一度目の時はマティアスさんに頼んで知り合いのもとに行ったので、どの子も可愛がられていると思う。だが、二度目の時は裏返した依頼書からアレンとエレナが選んで、どの依頼主のもとに行くか決まったので、パステルラビット達がどうなっているかはわからない。
「だいじょーぶ！」
「ちゃんとえらぶ！」
アレンとエレナはといえば、何故か自信満々である。
裏返した依頼書にも勘が働いているのだろうか？　うちの子達の勘は馬鹿にできないから、それ

なら大丈夫なのかな？
「まあ、パステルラビット達が納得しているのならいいか」
僕が《無限収納（インベントリ）》から大きな籠（かご）を取り出すと、アレンとエレナが慣れた手つきでパステルラビット達をそこに入れていく。
「「いやいやいや！」」
「タクミ、本当に待て！」
「そうですよ。タクミさん、ちゃんと説明してください」
エヴァンさんとスコットさんが説明を求めてくる。
「パステルラビットは知っての通り、とても弱いです」
「ああ、そうだな」
「ええ。しかし、危険を察知する能力に長（た）けていて、捕まえようとしてもなかなかできない魔物ですね」
二人の言う通り、それがパステルラビットの一般的な常識だな。だけど――
「どうやら、捕まえようとギラギラしていると、危険を感じて逃げるようなんです。そして、捕まえる気がないと、何故か寄ってきます」
「まさか！」
僕の説明を聞いて、エヴァンさんとスコットさんが目を見開く。

「実際にそうなんですよ。今だって籠に入れていますけど、閉じ込めているわけではないので逃げようと思えば逃げられる状態です。でも、逃げないでしょう？」
「……本当に逃げてないな」
「……ええ、嘘（うそ）のようです」
僕の説明に信じられなさそうにする二人だが、籠に入れられているパステルラビットをまじまじと見てしばらく呆然としていた。
「はい、どうぞ」
僕は籠からパステルラビットを抱き上げ、エヴァンさんとスコットさんにそれぞれ一匹ずつ手渡す。すると、二人は恐る恐るパステルラビットを撫（な）でていた。
「うわっ、懐っこいな～」
「ええ、飼っていれば懐いてくるとは聞きますけど……それでも初めのうちはなかなか懐かないはずなんですがね～」
「それ、捕まえられて怯（おび）えていたんじゃないですか？」
無理矢理捕まえられた後なら怯えているはずだ。そこから少しずつ、本当に少しずつ警戒を緩めて懐くのだろう。
僕の言葉に、二人は納得したようだった。
「それにしても、タクミ達と行動していると驚かされることばっかりだな～」

「本当にですね。まだ半日も経っていないんですけど、もう何度驚いたことか」
「今はまだ数えられる程度だが、絶対にまだまだ増えるだろうから、数えても無駄じゃないか？」
「それはそうですね」
今のところ驚かせているのは子供達であって、僕ではないと言いたいが……この先、僕がやらかさない保証はないしな～。うん、黙っておこう。
「「あっ！」」
アレンとエレナがまた何かを見つけて走り出した。
「お、今度は何を見つけたんだ？」
「薬草のようですね」
エヴァンさんとスコットさんは、子供達が次に何をやるのか、もはや楽しみなようだ。
「「また、いた～」」
そして戻ってきたアレンとエレナは、三匹のパステルラビットを連れていた。これで全部で九匹になったな。
「またかよ！」
「普通はそんなにほいほい見つかりませんよね!?」
エヴァンさんとスコットさんからすかさず突っ込みが入る。
「「あとね～」」

「キノコも」
「あったの～」
さらに、アレンとエレナが差し出したのは、今回の依頼の品である夜光茸だった。
「あ、これ、夜光茸だね」
「何っ!?　おいおいおい！　まだ日が暮れてないぞ!?　夜にならないと見つからないんじゃないのか？」
「いえ、エヴァン。日が暮れたほうが探しやすいだけで、見つからないわけではありません。ありませんが……そう簡単に見つかるものではありませんよ？」
エヴァンさんとスコットさんが今度は呆れたような声を出す。
夜光茸はその名の通り、夜になるとほんのり光るキノコだ。だが、生えている場所が木陰などの見つかりづらい場所であるため、ほんのり光っていてもはっきりとはわからない。
それなのに、アレンとエレナは光ってもいない夜光茸を見つけてきたのだ。
「よく見つけたな～」
「「このこたちいた～」」
「ああ、パステルラビットがいたところに、ちょうどキノコがあったのか？」
「「そう！」」
偶然だったらしい。それにしても、運がいいな。

「夜光茸だってわかって採ってきたのか？」
「「うん！」」
「よく特徴を覚えていたな～。偉い、偉い！」
「「えへへ～」」
光っていない夜光茸は、ほとんど特徴がなく、他のキノコと見分けがつきづらい。
なので、明るい時間帯に採取するには、しっかりと特徴を覚えていないといけない。
だが、子供達はキノコだからと採ってきたのではなく、ちゃんとわかっていて採ってきたようだ。
「この子達、ヤバいな」
「ええ、本当に。エヴァン、タクミさんの言った通り、私達の出番がなくなりそうですよ」
「それは本当にまずいな」
「ええ、ここからはいっそう気を引き締めて行きましょう」
「おう」
エヴァンさんとスコットさんがこそこそと二人で話し合い、気合を入れ直していた。

「……まさか」
引き続き、子供達が採取しながら山を進んでいると、スコットさんが思わず……といった風に声を漏らす。そんな彼の姿に、エヴァンさんが首を傾げていた。

「スコット、どうしたんだ？」
「いえ、子供達が採っているものが黄昏草だったので、目を奪われていただけです」
「えっ、黄昏草!?　それ、俺でも知ってるやつ！　滅多に見つからない薬草じゃなかったか!?」
「その通りです」
稀少な薬草を見つけて採っている子供達を、スコットさんが呆然と眺め、エヴァンさんは驚きながら凝視している。
「おにーちゃん！」
「こっち、こっち！」
「「ヒカリそうがあったー」」
「え、ヒカリ草？　また凄いものを見つけたな～」
「「……」」
ヒカリ草もまあまあ稀少な薬草だ。ほいほい見つけられるものじゃないはずなのだが……うちの子達は簡単に見つけてくるな～。
エヴァンさんとスコットさんは、とうとう黙り込んでしまった。
「「あっ！　あれ！」」
そんな時、アレンとエレナが今回の依頼の対象であるジャンボエルクをいち早く発見する。
そしてすぐに、エヴァンさんとスコットさんもそちらに目を向けた。

「お、ジャンボエルクだ」
「エヴァン、依頼の品は角と皮ですから、傷つけないようにしてくださいよ」
「わかってるよ。――って、おい!?」
エヴァンさんとスコットさんが慎重に相談している間に、アレンとエレナが走り出していた。
「おい、ちょっと待て！」
「「や～」」
エヴァンさんが慌てて子供達を追いかけていく。
「そいつは俺にやらせろ！」
「「えぇ～～～」」
「頼むから」
「「むぅ」」
エヴァンさんが子供達相手に真剣に頼み込みだした。走りながらね。
「あとで遊んでやるから！　な？」
「「ん～、わかった」」
アレンとエレナがピタリと立ち止まる。
どうやら、遊んでもらえるならと獲物を譲ったようだ。
「はぁー！」

エヴァンさんはジャンボエルクに向かって走りながら、背負っている大剣を抜く。
そして、そのまま思いっ切り振り抜いて、ジャンボエルクの首をすぱりと落とした。まさに一刀両断。
「「おぉ～」」
「お疲れ様です、エヴァン」
「凄い！」
豪快だが、とても的確に急所を捉えていた。
「よし、これで二つ目の依頼が完了だな」
「その大剣でよく首を狙えますね」
「まあ、それは訓練と実践の成果だな」
感心した僕の言葉に、エヴァンさんは頷いた。
訓練に実践か～。まあ、やっぱりそれが大事だよね。
「じゃあ、さくっと解体しちゃうから、ちょっと待っててくれ」
エヴァンさんがジャンボエルクの解体を始めると、アレンとエレナが近くで見学していた。
「スコットさん、これからどうしますか？　予定を繰り上げて海岸に向かいますか？」
「んー、そうですね～。急ぐ必要はありませんから、やはり予定通り夜光苔の採れるという場所に向かいましょうか。夜光苔は多くても買い取りしてもらえますからね。どうですか？」

「僕はそれで大丈夫です。――アレン、エレナ、このまま山を進むけど、いいよね？」
「「いいよー」」
「エヴァンも構いませんね？」
「お～」
子供達やエヴァンさんも了承したので、ジャンボエルクの解体が終わってからさらに森の奥へと進む。
「「んにゅ？」」
すると、アレンとエレナがまた何かを見つけたようで、突然茂みの奥へと突っ込んでいった。
「今度は何を見つけたんだろうな？」
「魔物の気配はありませんから、薬草ではないですか？」
エヴァンさんとスコットさんは子供達が何を見つけたのか予想している。だいぶ子供達の行動にも慣れてきたようだ。
スコットさんの言う通り近くに魔物の気配はないので、僕も追いかけずに待つことにする。
「「みて、みて！　キラキラしてるー」」
「「っ!!」」
しばらくして子供達が戻ってきたのだが、二人が持っていたものに僕達は絶句した。
「ちょ、ちょっと待て！　ク、クリスタルエルクの角だと!?」

「そ、それをどうしたのですか!?」
「「もらったー」」
「「はぁ!?」」
アレンとエレナが持ってきたものは角。それも水晶の角だ！
貰ったとは言っているが、どうやって貰ったかを先に確認しておかなければならない。
「アレン、エレナ、クリスタルエルクと会ったのか？　貰ったってことは、倒したり怪我をさせたりはしてないな？」
「「してないよー？」」
「そうか、それならいいが。クリスタルエルクには絶対に怪我をさせちゃ駄目だよ」
「「うん、わかったー」」
クリスタルエルクは真っ白な毛並みに、水晶のような角が特徴のシカの魔物だ。
その角は身体欠損に効くポーション……手が生えたりする魔法薬の材料とされている。しかし他に代えが利かないこともあって、クリスタルエルクは一時期、乱獲されて絶滅の危機に晒されたことがあるようだ。
それで、クリスタルエルクを死傷させるのは全国的に禁止されることになった。角は定期的に生え変わるので、倒さなくても手に入るからな。種の保存が優先されたのである。
というわけで、クリスタルエルクは魔物なのだが、聖獣という括りだ。他に、浄化の作用のある角を持つユニコーンとかもそうだな。
「「おにーちゃん、はい！」」
そんなことを思い返していると、アレンとエレナが両手に抱えている水晶の角を差し出してくる。
「これ、売ったら絶対に騒ぎになるやつですよね？」
「当たり前だろう!?」
「ええ、簡単には売りに出せません！」
だよね。売る必要があるなら、国……ガディア国の王様であるトリスタン様に売ったほうがいいだろう。というか、確実に欲しがると思う。なので、ルーウェン家次男のグランヴァルト様――ヴァルト様の結婚式に参加するために王都に行く予定があるから、その時にでも売り込めばいいか。
「じゃあ、売らずに僕が買い取ったということにして、相場の半分を二人に渡せばいいですね」
とりあえず、すぐに角を売るのは避けようと、別の案を出してみる。
「「いやいやいや！」」
すると、二人はとんでもない勢いで首を横に振った。
「タクミ、何を言っているんだ!?」
「そうですよ。何故、角の料金を私達が受け取らなくてはいけないんですか!?」
「いや、でも、依頼中に手に入れたものは売って、総額を分けるものなんですよね？」
武器講習をしてもらった時にスコットさんに説明されたことだ。道中で倒した魔物や手に入った

薬草とかは基本的に売って、それも報酬と一緒に分けるものだってね。
その分配の割合は、僕達は半々と話してあった。
「それは協力して手に入れたものについてです。子供達だけで倒した魔物や採取した薬草、それにパステルラビットについては、勘定には入れないでください。その分を受け取ってしまっては、私達の立つ瀬がありません」
「そうだ、そうだ！」
スコットさんの言葉にエヴァンさんが同意する。
依頼中に手に入れたものは全てのはずなんだが、いろいろ除外された。
「え～、後から揉めるからしっかりと報酬の割合を決めておけと教えてくれたのはスコットさんじゃないですか。それで半々って決めたのに、覆すんですか～」
スコットさんが言っていることは、僕達にとっては利益が増えて悪いことではないので、反論する必要はないんだけど……何となく反論してみた。
「〝基本的に〟と言いました！　これは基本的なことではありません！」
「えぇ～」
「タクミさん、完全に面白がって言っていますよね？」
「あ、バレました？」
スコットさんと楽しく話していると、アレンとエレナが僕の服の裾を引っ張ってくる。

「「ねぇ、ねぇ、おにーちゃん」」
「どうした？」
「「あれー」」
「ん？　――クリスタルエルクっ!!」
アレンとエレナが示す方向に、いつの間にかクリスタルエルクがいた。
「うわっ、マジか」
「……本物ですか？」
僕もかなり驚いたが、エヴァンさんとスコットさんの驚きは僕以上で、完全に動きを止めている。
「あ～、でも、そうか……」
そういえば、アレンとエレナは、角を貰ったと言っていた。それなら、クリスタルエルクが近くにいて当たり前だよな～。
「「おにーちゃん、おいでだって～」」
「おいで……って、クリスタルエルクが？」
「「うん、そう！　いこう！」」
子供達はそう言うと、僕の手を引いてクリスタルエルクに近づいて行く。
「どうも、こんにちは」
『クー』

クリスタルエルクの傍に連れて来られたが、どうしたらいいのかわからなかったので、とりあえず挨拶をしてみたら……返事があった。
普通に意思疎通ができているな。たぶん。
「えっと……子供達が角を持ってきたんですが、本当にいただいてもいいんですか？」
『クー』
「大変助かります」
クリスタルエルクは、鳴きながら頷く。
聖獣と言っても野生の生きものなんだが、かなり大人しい性格のようだ。
「どうしたのー？」
『クー、クー』
アレンとエレナが無邪気にクリスタルエルクに抱き着く。
「うん、うん。そうなんだ～」
「……」
アレンとエレナは……クリスタルエルクと会話しているんだろうか？　あれは意思疎通とか、そういう感じではないな～。
うちの子達は神様の子供だから、聖獣と会話できるんだろうか？
「おにーちゃん」

「あっちだってー」
「あっちがどうしたんだ？」
「いっしょに」
「いくー」
子供達がそう言うと、それを待っていたかのようにクリスタルエルクが歩き出した。
しかも、いつの間にか背に乗っていた子供達を連れて。
いつぞやのグリフォンに続き、クリスタルエルクにも誘拐されている？
「おーい。ついて行かないと駄目なのか？」
「「そう！」」
「……そうか」
アレンとエレナが後ろを振り向きながら手招きしてくる。
「エヴァンさん、スコットさん――」
「タクミ、問題ない。先に行け」
「私達は少し距離を取ってついて行きます」
エヴァンさんとスコットさんに、クリスタルエルクについて行く了承を得ようと思って振り返ると、名前を呼んだ時点で二人から食い気味に了承された。
しかも、クリスタルエルクが離れたので、やっと僕のほうに寄ってくる。

「いやいや、どうして距離を置くんですか。一緒に行けばいいじゃないですか」
「無理」
「……」
二人同時に拒否られた。見事と言えるほど声を揃えてだよ。
「おにーちゃん、はやく～」
「はいはーい」
先を行く子供達に催促されたので、もう一度エヴァンさんとスコットさんを見たが、二人からにこやかに手を振られた。まるで〝いってらっしゃい〟と言わんばかりにね。
「あ、パステルラビットは私が預かりますよ」
さらに、にっこりと微笑むスコットさんが、パステルラビットが入った籠を受け取ろうとこちらに手を差し出してくる。
「……お願いします」
これはもう何を言っても駄目だと思い、僕はパステルラビットを預けてから、駆け足で子供達とクリスタルエルクの下へと向かったのだった。

「で、どこに行くんだ？」
「んとね～、もうちょっと？」

子供達はどこに行くのかまでは聞いていないらしい。
「危ないところに連れて行かれるわけではないんだな？」
『クー』
「だいじょーぶだって」
危険はないようなので、僕達は大人しくクリスタルエルクの誘導で山の奥へ進んでいく。
ちなみに、ちらりと後方を窺うと、エヴァンさんとスコットさんは、しっかりと一定距離を保ってついて来ていた。
『クー』
「ここ？　――おにーちゃん、ついたって！」
そして、辿り着いた場所は、小川が流れる渓谷だった。
「あっ、なかまー」
「うわっ、本当だ」
驚くことに、その渓谷には、案内してきた個体以外のクリスタルエルクがいた。
「もしかして、ここは巣か？　え？　そんな大事な場所に僕達を連れてきて大丈夫なのか!?」
僕達はクリスタルエルクを狩る気はないが……ここは人間をほいほい連れてきてはいけないところだろう!?
『クー』

「うわっ、何だこれ！」
「「おぉ～、いっぱい！」」
さらに、クリスタルエルクが示したところには、大量の角が転がっているではないか！
「「くれるのー？」」
『クー』
「「ありがとう！」」
「いや、待って！　本当にちょっと待って！」
僕の思考処理が追い付かない。
「「おひっこし？」」
『クー、クー』
「「そうなんだ～」」
僕の混乱をよそに、子供達とクリスタルエルクのやりとりは続く。
それからひと通り話を聞き終えたアレンとエレナが言うには、クリスタルエルクは棲み処を別の場所に移す予定なので、ちょうど近くにいた僕達に角をくれるらしい。
クリスタルエルクは、自身の角に価値があることを知っているようで、下手な人間には渡したくないって……凄く具体的な内容だな!?
「「おにーちゃん、よかったね！」」

「いや～……さすがにこれを貰うわけには……」
いくらなんでも「はい、ありがとう」と受け取るには気が引けるものと量である。
「「だめなのー？」」
『クー？』
「……」
僕が躊躇っていると、子供達とクリスタルエルクは揃って首を傾げる。
しかも、周りにいる他のクリスタルエルクまで首を傾げているではないか！
「「……駄目っていうわけじゃないんだけどな」」
「「じゃあ、もらおう！」」
「えっ？」
完全に拒否できずにいると、アレンとエレナが角を拾っては僕に渡してくる。
「はい！」
「ほい！」
「ちょっ!!」
「これも！」
「こっちも！」
一つ目を咄嗟に受け取ってしまったのがいけなかった。

アレンとエレナが、次々と僕の腕に容赦なく角を積み上げていく。しかも、クリスタルエルクも手伝っているではないか！
「うわっ、二人ともちょっと待て！　これ以上は持てないから！」
「しまって、しまって！」
「まだまだあるよ！」
僕は抵抗するのを諦めて、おとなしくクリスタルエルクの角を《無限収納》に収めていく。
もうこれはいっそのこと、トリスタン様を通して各国に配るか？　今はどこの国の王も良い君主のようだしな～。
そんなことを考えているうちに、大量にあった角の収納が終わった。
「ありがとう。ありがたくいただくよ」
『クー』
改めてお礼を言うと、クリスタルエルクが満足そうに頷いた。
「ばいばーい」
大量の角を貰った僕達は、クリスタルエルクに別れを告げて、渓谷を後にするのだった。

◇　◇　◇

クリスタルエルクの巣を離れた僕達は、日が暮れる前に野営に適している場所を探すことにした。良い具合に夜光苔の採取地に近かったしね。
「すげぇ、疲れた」
「私もです」
そして、良い場所を見つけて腰を落ち着けた途端、エヴァンさんとスコットさんがぐったりとして項垂れる。
「……お疲れ様です。僕が周囲の警戒と食事の用意をしますので、休んでいてください」
「おー、悪い。頼む」
「すみませんが、お願いします」
エヴァンさんとスコットさんの了承を得て、僕は晩ご飯の準備を始める。
「さて、ご飯は何にするかな？」
「んとね～……」
エヴァンさんとスコットさんには気苦労を掛けたようなので、美味しいものを食べてもらいたい。
そう思いながら、子供達に何が食べたいか確認する。
「アレン、カレーがたべたい！」
「エレナも！　おにくとやさいいっぱいの！」
「カレーな。いいよ。でも、ご飯じゃなくてパンな」

「「うん、パンもすき！」」
子供達がカレーをリクエストしてきたので、了承した。まあ、さすがにカレーライスにするのは止めたけどね。
この世界でお米は『白麦』という穀物で、家畜用の飼料に使われることが多い。今まで食べさせて拒否反応を見せた人はいないが、今、エヴァンさんとスコットさんはお疲れの様子だから、驚かせるのは控えようと思ったのだ。
「じゃあ、早速作るか」
「おにくゴロゴロー」
「やさいもゴロゴロー」
「了解。肉はオークでいいかな？」
「「うん！」」
子供達のリクエスト通り、肉も野菜も大きくゴロゴロとしたカレーを作っていく。
「すごい腹の減る匂いだ。これは近頃フィジー商会が売り始めた調味料……カレーだっけ？　それを使った料理か？」
「はい、そうです」
カレーの匂いが漂い始めると、エヴァンさんが近寄ってくる。
フィジー商会は着実にカレー粉の知名度を上げているようだ。

「よし、カレーはもう少し煮込めばいいな。あとはサラダかな」
「「おにーちゃん、タレはー？」」
「ドレッシングな」
「「それ！　ドレッシングもつくるー？」」
「作るよ～。何がいい？」
「「タシねぎー！」」
「了解」
タシ葱――玉葱ドレッシングを作り、サラダができあがった頃には、カレーも良い具合に煮込まれていた。というわけで、すぐに食べることにする。
「これはアレンとエレナのな」
「「はーい」」
「エヴァンさんとスコットさんもどうぞ」
「美味そう～」
「とても美味しそうですね。スープのようでスープではないんですね」
深めの皿によそったカレー、タシ葱のドレッシングをかけた生野菜のサラダ、白パンと新作チーズパンを配ると、子供達だけでなくエヴァンさんとスコットさんもワクワクとした表情をしていた。
そして、食べ始めれば、みんなは黙々と食べ進めていく。

「タクミ！　どれも美味い！」
「本当にとても美味しいです。何しろ、エヴァンに野菜を食べさせるなんて凄いです」
「このサラダにかかっているタレが美味いからな！　これなら食える！」
……苦笑するスコットさんの表情を見る限り、エヴァンさんは野菜嫌いらしい。
「うちの子供達もドレッシングをかける前は食べるのを嫌がりましたが……」
「では、エヴァンは子供と一緒ということですね」
「だって、草だぞ！　味がなければ、食えたもんじゃないだろう！」
草って……まあ、サラダに使う野菜は葉っぱものが多いけどさ～。
「そういえばタクミさん、サラダにかかっているものはドレッシングというものなんですか？」
「ええ、はい。これは炒めたタシ葱に、ショーユと酢などの調味料と油を混ぜたものです」
「そうなんですか？　というか、教えていただいても良かったのですか？　秘蔵のものなのでは？」
「秘蔵!?　いやいや、そんなものじゃないですって！　ただ調味料を混ぜたものですから！」
「これほどの味でしたら、食堂で提供したら大繁盛しますよ。どうですか？」
どうですか？　って、僕に食堂を経営してくれって言っているのかな？
「食堂をやる予定はないですね。レシピが欲しいならあげますから、自分で作るか、泊まっている宿で作ってもらってください」
「……タクミさん、そういうレシピはほいほい人に渡すものじゃありませんよ」

「親交がある人にしか渡していませんよ」
「普通は親交があったとしても渡しませんよ」
「じゃあ、僕は普通じゃないんで」
「……」
レシピをほいほい渡しているつもりはないが、とりあえず今は開き直ってみた。
そんな僕に、スコットさんは絶句している。
「それで、レシピはいります？」
「……お願いします」
「ふふっ、了解です」
にやにや笑いながらスコットさんを見ると、スコットさんは〝参りました〟とばかりに深々と頭を下げていた。あとで紙にレシピを書いておこう。
「タクミ、カレーとチーズの入ったパンのお代わりはあるか？」
「ありますよ。食べますか？」
「頼む！」
「アレンもー」
「エレナもー」
「はいはい」

僕とスコットさんが話している間、マイペースに食べ進めていた子供達とエヴァンさんはお代わりを要求してくる。
「このパンも初めて見たんだが、タクミが作ったのか？」
「まあ、そうですね。でも、冒険者ギルドのすぐ傍のパン屋に売っていると思いますよ」
一緒に開発したパン屋さんはそことは違う店だが、レベッカさんがギルド傍のパン屋でも売れるようにすると言っていたので、きっともう売っているだろう。
「クリームパンとか売っている店だな！　最近いろんなパンが増えたから、その日の気分で選べていいよな！」
どうやらエヴァンさんは、店の常連のようだ。
「甘いものが大丈夫なら、食後に甘いものはいりますか？」
「「いる！」」
一応、エヴァンさんとスコットさんに聞いたのだけど、元気よく返答したのは子供達だった。だが、エヴァンさんとスコットさんも期待するような目をしていたので、冷やしたミルクプリンで口の中をさっぱりさせた。
少し食後の休憩をしていたところで良い具合に薄暗くなってきたので、軽い運動がてら夜光茸を探しつつ散策することにした。
「「ん～、あっちかな～。――あっ！」」

アレンとエレナが気になる方向へ適当に歩いていると、二人は声を上げる。
「あそこ！」
「あった！」
子供達が示す方を見れば、ほんのり光る場所が目に入った。
「「いっぱいあったー！」」
「お、夜光茸の群生地だな」
早速とばかりに、アレンとエレナが張り切って採取しに走っていく。
「……あっさり見つかったな～」
「……ですね。それも一つや二つじゃなくて、群生地です」
一緒に散策に来ていたエヴァンさんとスコットさんが、大きく溜め息を吐く。
「運が良かったですね～。群生地だから遠目でも光って見えましたし」
単体の夜光茸だと木陰などに隠れて見つけづらいものだが、見つけたのは群生地だったのでとてもわかりやすかった。
そう思いながら言うと、エヴァンさんがジト目を向けてくる。
「運が良かった？　それで済む話か？」
「それで済ませましょう。深く考えても疲れるだけです」
「そうだな。――じゃあ、子供達だけに任せないで俺達も採取するか」

「ええ、そうしましょう」
エヴァンさんとスコットさんも採取を始めたので、僕も夜光苔を集める。
「おにーちゃん、みて～」
「んー？」
「ツキヨコケと」
「つきみそうも」
「あったよ～」
「おぉ、良いものを見つけたな！」
ツキヨコケも月見草も、三つの月が同時に出る夜にしか採れない薬草だ。
本当に今日の子供達は本当に絶好調である。
「いっぱいとったねー」
「本当にな」
夜光苔、ツキヨコケ、月見草の他にもいろんな薬草を採った僕達は、ほくほくとした気持ちで野営場所に戻った。
そして、見張りはエヴァンさん、スコットさん、僕の順で三交代することになったので、子供達を毛布に包んで早々に眠りについたのだった。

立ち読みサンプル
はここまで

翌日、まだ暗い時間にスコットさんと見張りを交代した僕は、周囲の警戒をしつつぼーっとしていた。そして明るくなってきたところで、朝ご飯と、ついでにお昼ご飯用にサンドイッチを作り始めた。
「……うにゅ～」
「おはよう」
「おはよ～。いいにおい～」
料理を作り終え、パステルラビット達に餌をあげていると、子供達が目を覚ます。
二人は料理に気づいたらしく、目を擦りながら鼻をくんくんさせている。
「おいしそう～」
「あさごはん？」
「朝はスープと白パンだよ」
「サンドイッチはー？」
「サンドイッチはお昼用だよ」
「ええ～」
サンドイッチは、レタスとハムとチーズのサンド、たまごサンド、ツナマヨサンド、ポテサラサンド、カツサンド、テリヤキサンド。さらに生クリームにイーチの実、カスタードにナナの実のフルーツサンドを全部二組ずつ作り、半分に切ったものをセットにして一人前にした。あ、アレンと